

愚直経営通信

皆様の周りにこの通信が役立つような方がいらっしゃればご紹介頂ければ幸いです。

2019年5月

テーマ「メンターとしての中国古典」

メンターとは

4月より新しいブログを始めました。テーマは「メンターとしての中国古典」です。これまで約10年学んで、私に自信と勇気を与えてくれた中国古典を分かりやすく解説して行くことにしました。

メンターとは、仕事や人生における「指導者」「助言者」「教育者」「理解者」「支援者」のことを指します。私の解釈としては、「背中を押す人」のことだと考えています。相手の意志を尊重し、目標や課題を引き出すということでは、コーチングと共通しています。加えて、メンターは相手を行動に促すように「大丈夫！やってみましょう。あなたの持ち味を活かせばきっと上手く行く。その選択は間違いないので自信を持って！」と背中を押すことがポイントです。

私は経営コンサルタントとして、改善・改革の提案や研修などの教育を行います。幾らより良いアイデアが見つかったとしても、躊躇して行動に移さなかったり、中途半端な取り組みで成果に至らなければ何の意味もありません。そこで、新人からベテラン社員、管理職、そして経営陣の方までを対象に背中を押すことが私の大切な使命と認識しています。

私自身、多くの方のアドバイス・支援により行動できています。更に中国古典での学びで、気持ちの整理ができて、迷うことなく一步を踏み出せているように思います。

中国古典は少し難解ですので、私なりの解釈を加えて活用していただける方を増やしていきたいと考えています。今回はその1、その2をご紹介します。

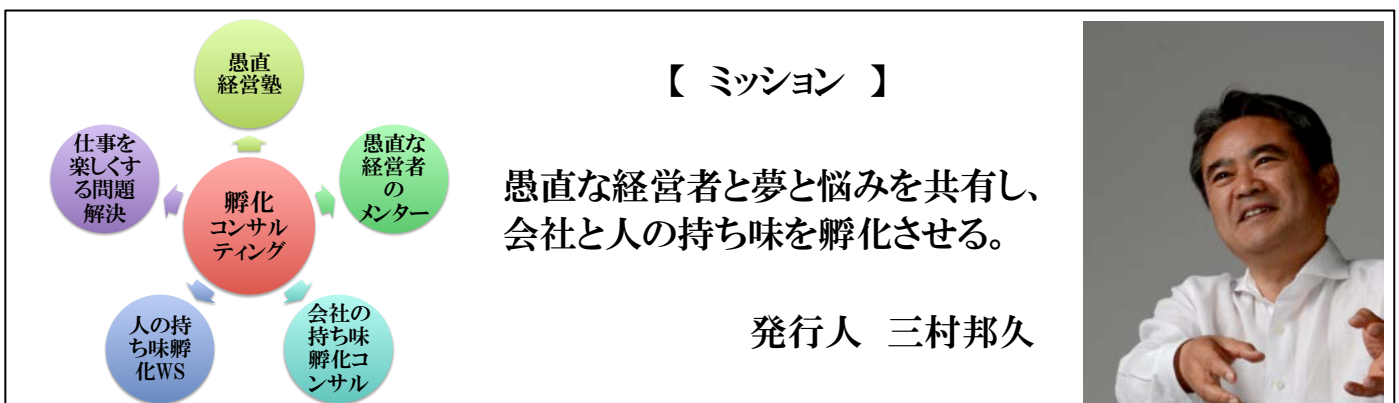
目次

1. メンターとは
2. 「義を見て為ざるは勇なき也」
3. 「これを知る者はこれを好・・・」
4. メンタリング・マネジメント
5. オススメ一冊「国家と教養」

【 ミッション 】

愚直な経営者と夢と悩みを共有し、
会社と人の持ち味を孵化させる。

発行人 三村邦久



メンターとしての中国古典①「義をみて為(せ)ざるは勇なきなり」

メンターとしての 中国古典

「義をみて為(せ)ざるは勇なきなり」

論語にこんな一節があります。その意味は、「人として正しいことをやらないのは勇気がない」ということです。つまり、「正しいと思ったことは、自信を持って行動に移しなさい!」と、私たちの背中を押してくれているのです。

人生は意思決定の連続

我々は日々意思決定を迫られます。日々どんな選択をするかによって、大きく人生が変わります。小さな判断でも、積み重ねれば決定的な違いをもたらします。しかし、



- やるべきことはわかっているが、躊躇して最初の一步が踏み出せない
- やり始めたが、心が折れて途中で頓挫してしまった
- 決断ができず、後になって後悔した

誰しももう少し勇気があれば、人生がもっと良い方向に変わっていたのではないかと思った経験があるのではないのでしょうか。

そんな時に、誰かが少し背中を押してくれれば、勇気を持って良い選択ができるかもしれません。

「義」とは

義という文字は、「美」と「我」を組み合わせてできています。「美」という文字は、「大きい羊」、それは生け贄を意味します。生け贄は仲間を救うために、犠牲になるものの象徴です。つまり自分を犠牲にしてでも、人のために何かすることを「義」というのです。貢献に焦点を当てた生き方が、人として一番美しい姿であるというのです。

一方、不義は義理を欠く行為、つまり人を騙したり、陥れたりする身勝手な行為をさし、人として醜さの表れと言えるでしょう。

人間の弱さ

人として何が美しい行為で、何が醜い行為であるか、我々は本能的にわかっています。しかし、自分可愛さに躊躇したり、誤った選択をすることが少なくありません。

例えば、

- 電車で座席に座っていて、目前に老人や妊婦さんが来た時、「席を代わるべきであるが、このまま座っていたい。誰かが代わるだろう。自分より若者もいるのだし、彼らが代わるべきである」などと寝たふりを決め込む。

- 会議で納得できない方向に話が進んでいる。異論を唱えるべきであるが、波風を立てて

会議を紛糾させると大変なことになる。空気が読めない奴とレッテルを貼られたり、孤立無援になるのも嫌だ。面倒なことは避けて、発言せずに済ませてしまおう。

・大きな成果を求められているが、正攻法では結果が出せない。そんな時、間違っているとわかっている、不正や改ざんに手を染めてしまう。一度だけと決めたいけれども、そこから抜けられず繰り返して神経が麻痺してしまう。

法を犯すことは論外にしても、個人の欲や組織の利益のために、人として間違った行為を選択することは、心の弱さを表すものであり、正に「義を見てせざるは勇なきなり」に該当します。

一般的に勇氣という、失敗を恐れず、大胆不敵に実行することをさしますが、それは単なる無謀に過ぎず、一か八かに賭けるのはギャンブルであり評価できません。

正しい選択をするために

世にはリーダーとして重責を担っている人がたくさんいます。会社の発展や部下の成長を考えれば、短期的な利益を犠牲にしても、新規企画や新規開拓や人材育成など投資的な時間やお金を使うでしょう。しかし、利益至上主義で、目先の利益を優先すれば、将来への投資的な行為は先送りするでしょう。

ここが、組織の方向性を決める大きな分岐点となります。どちらを選択するか、その判断基準も「義を見て為（せ）ざるは勇なきなり」と言えるでしょう。

自信の源泉を掘る

成功を導くためには、やり始めたら迷いなく思い切ってやり抜く力が必要です。つまり自信は成否を大きく左右します。では自信はどうすればつくのか。一つは成功体験を積むことです。しかし、未知のことにチャレンジ

する時に成功体験はありません。根拠なき自信も必要かもしれません。しかし、真面目で心配性の人は根拠なき自信など持てないでしょう。

では何を自信の拠り所とするのか。それは「正しいことをやっている」という自信です。自分の利益ではなく、貢献に焦点を当てて、人の幸せのためにやっている。疚しいことは何一つない。そんな晴れ晴れとした清々しい気持ちでやっていれば、周囲の共感を得られ、物事は上手く進んでいくでしょう。

孟子にこんな一節があります。

「自ら反りみて縮（なお）くんば、千万人と雖も吾れ往かん。」その意味は、自分自身を省みて疚（やま）しいところがなければ、たとえ敵が千人万人だとしても、私は進んで行くという意味です。

最後に

実は私自身、かつては「論語」など儒教の思想を懐疑的に見ていました。それは過去において政治的社会的に悪用され、多くの人を不幸にした歴史があったからです。しかし、それは思想や言葉が悪いのではなく、利用した人の心が悪いのであって、本来の意図を理解し、良いものは上手く活用すべきだと考え直しました。

中国古典には、人間社会の規範を説いた儒教だけでなく、老荘思想や易経といった宇宙から社会を見たマクロ視点の思想もあります。4000年の風雪に耐えてきた中国古典の言葉には、人に勇氣を与え、人を導く力があります。その言葉を自分のメンター、つまり背中を押してくれる経験豊富な応援者として活用することをお勧めしたいのです。

ブログサイト

<https://www.compass-point.jp/mentor/>

メンターとしての中国古典②「これを知る者はこれを好む者に如かず」

「これを知る者はこれを好む者に如(し)かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如(し)かず」

好きで楽しむが最強！

私の好きな論語の一節です。その意味は、物事を理解し知っている者は、それを好んでいる人には及ばない、物事を好んでいる人は、それを心から楽しんでいる者には及ばない、ということです。

「好きこそものの上手なれ」の言葉になるように、好きなことであれば楽しくできるし、楽しんでやればうまくできる。好きであれば長続きするし、没頭もできるので、腕が上がり成果も出て、誰に負けないレベルに達するということです。つまり、好きで楽しいがフローの状態につながるのです。

※フローとは、何かをしているとき、集中力が最高になり完全に没頭し、作業プロセスを楽しむといった感覚に入り込んでいるような精神状態をさします。

やらされ感、義務感が大敵

しかし、現実には勉強でも仕事でもすぐに結果が出るわけでもなく、辛く苦しいことが多々あります。やらないといけないことはわかっているけど、なかなか取りかかれない、ついつい先延ばししてしまう。そんなことが少なくありません。

会社なら、仕事が遅れていると、上司から指導され、改善を促されます。給料を貰うのですから当然でしょう。そうすると、「やらされ感」が生まれ、仕事がつまらなくなります。

気は向かないけれど、やらなければならない。義務感だけの仕事は苦痛以外の何物でもありません。こんなふうにイヤイヤやっている状態では、必要最低限のことしかできず、良い結果も期待できません。

ではどうすれば良いのか？

その答えが、「好きで楽しい」ということです。仕事の内容自体が好きなら、自然と没頭するでしょう。時間を惜しまず、結果を気にせず、そのプロセスを楽しむことになるでしょう。好きなことを楽しんで没頭して精一杯やったのであれば、仮に結果が悪かったとしても、それは仕方がないとあきらめがつきます。

しかし、好きなことを楽しんでやっていたら、自然と創意工夫が生まれ、物事を突き詰めてやることになり、何らかのブレークスルーが生まれるでしょう。笑顔でやっていたら周囲の人もいい気分になり、チームワークも良くなるでしょう。結果、お客様の期待を超える結果を生み出す可能性が高まります。つまり、人事を尽くして天命を待つ、境地でしょうか。



学校教育の問題

好きで楽しいが、いい仕事・いい人生に条件であるにもかかわらず、学校教育では知識の量で優劣を決めます。つまり、「これを知る者」を増やす制度です。たしかに、学んで覚えてテストでいい点数をはじき出す過程で、集中力や忍耐力、学びの工夫、そして達成感を味わい、自信も身につけて、社会で生きていく基礎能力を養うことはできます。

しかし、ただ点数を弾き出すためだけの暗記は苦痛以外の何物でもありません。例えば、歴史などは人間を学び、未来を見通すための重要な学問であり、人生を豊かにする教養です。しかし、テストのためだけに年号や偉人の名前を暗記するだけの勉強は無味乾燥であり、テストが終われば綺麗さっぱり忘れてしまいました。また、知識量だけを問うことへの嫌悪感から、歴史嫌いや勉強嫌いを誘発していることも否定できないでしょう。

仕事を好きになるには

仕事は好きで楽しいことばかりではありません。では、どうすれば好きなことを楽しくできるでしょうか。

方法は2つ。

一つは、好きなことを仕事にする方法。例えば、音楽が好きでミュージシャンになる。絵が好きで画家になる。動物が好きで動物の飼育員になる。花が好きで花屋になる。初めての人とも話すのが好きだから、営業の仕事に、人のお世話をするのが好きだから介護の仕事に就く。

つまり、就職です。好きな仕事に就くことです(一般的に会社に入ることを就職と言いますが、実際は仕事内容を選ばず、会社に入る就社といえるでしょう)。

もう一つは、目の前の仕事の中に、好きで楽しい部分を見つけることです。

私自身、最初に勤めた会社には職種希望はなく就社しましたが、仕事をしながら会社の仕組み(システム)というものに興味を持ちました。汗を流して頑張っていることは大事ですが、社員が連携して効率よく成果を出すためには、ものづくりや経営の良い仕組み(システム)が必要不可欠と感じました。

誰に指示されるわけでもなく、自分で勉強して仕事に活かしました。これが現在の経営コンサルタントの道へとつながっています(当時から、私は人に言われてやるのが嫌で、上司に指示される前に先手をとって提案していました)。

また、40代になってからは、システムより人間そのものに興味の対象が移り、人のやる気(モチベーション)やいい働き方、人としてのあり方、いい人生に興味を抱くようになりました。もちろん、誰に強要されるわけでもなく。

人の感情や人生が対象となると、日常のすべてが学びの教材であり、仕事とプライベートの区分も曖昧で、仕事と勉強、遊びの境目もあってないようなものです。(笑)

好きで楽しいで仕事をすれば、自ずと結果はついてくるので、信頼され裁量権(自由)が増えて、管理されるストレスが減ります。時間やお金が自由に使えれば、ますます仕事が好きで楽しくなるという、プラスのスパイラル・サイクルに入ります。

好きで楽しいを問い続ける

しかし、現実には与えられた仕事をこなしていくだけで精一杯という人が大半です。今の働き方が問題と思っている、「仕方がない」「仕事はこういうもの」「言われたことをやっていたら身分は保証される」などと自分に言いかけ、ごまかし続けていると、自分で考えるということをしなくなり、奴隷のように組織に従うだけの人生で終わってしまう危険性もあります。

この世に生を受けた限り、幸せな人生を送ることが我々の使命です。

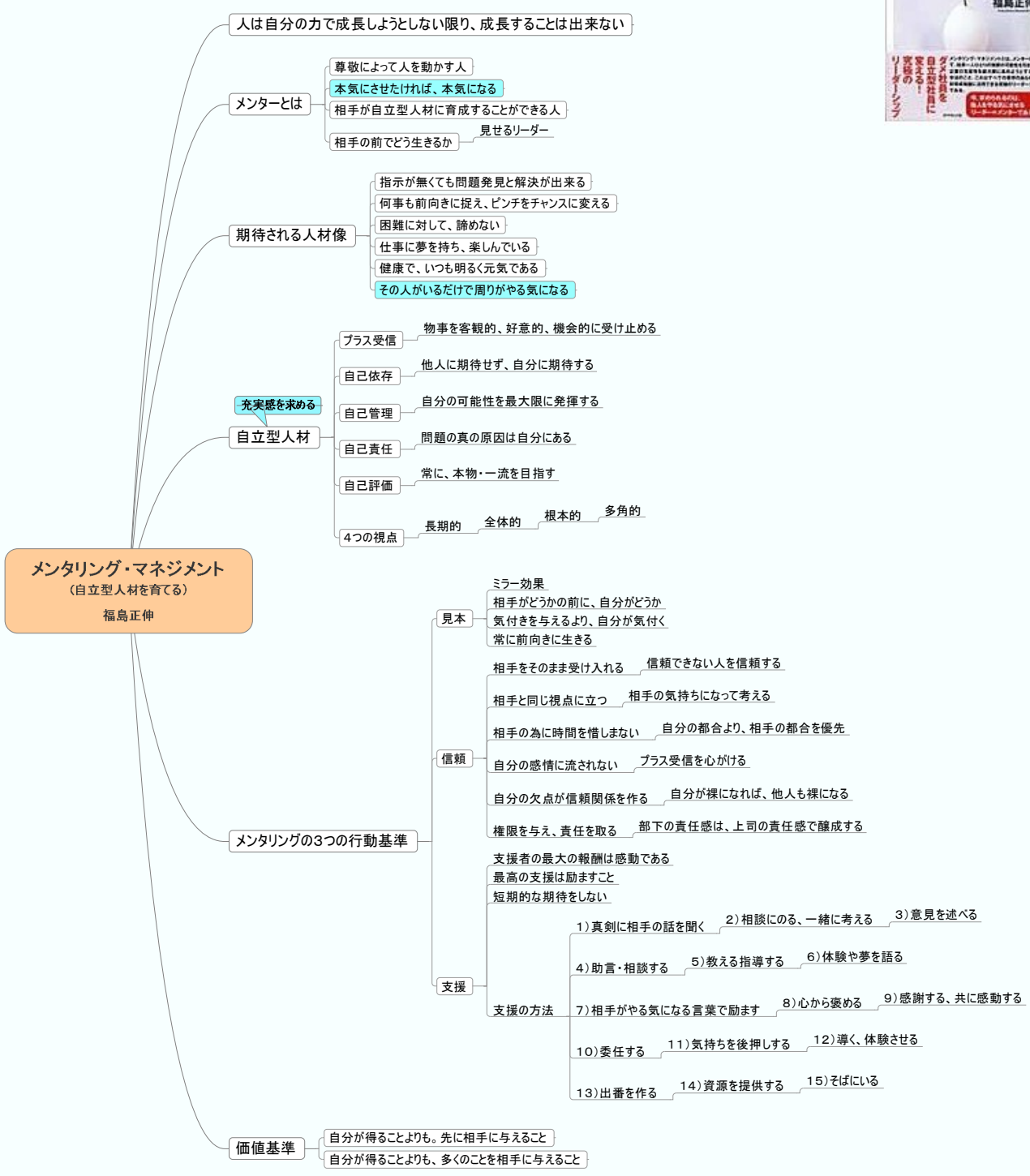
「仕事の何が好きで、何を楽しいと思えるのか」「どうすればうまくいくのか」「一生続けていくためにはどうすればいいのか」などと考えることは、境遇や立場にかかわらず、すべての働く人にとって重要なことではないでしょうか。

こんな問いに自問自答し続け、悔いのない人生を送りたいものです。



「メンタリング・マネジメント」 福島正伸氏

ゴルフもご一緒させて頂く福島正伸氏の著書「メンタリング・マネジメントを」読んでメンタリングのエッセンスをマインドマップに纏めていましたのでご紹介します。



オスズメの一冊「国家と教養」藤原正彦氏

●「教養」とは

教養とは、世の中に溢れるいくつもの正しい「論理」の中から最適なものを選び出す「直感力」、そして「大局観」を与えてくれる力。

●失われたお国柄

・小泉竹中政権の改革における規制緩和により企業が正社員に比べ給料が半分以下ですむ非正規社員を増やしたため、非正規はバブル崩壊以降これまでの全雇用者の20%から40%へと倍増した。

平均年収200万以下で、結婚し子供を育てるといふ今まで普通と思われていたことに二の足を踏むようになった。苦勞して育ててもその子が荒んだ社会で幸せになれるかどうか自信が持てない。

結果、20台での結婚が激減し、出生率もガタ落ちとなった。

・経済上の変化が人への優しさや穏やかさ、思いやり、卑怯を憎む心、献身、他者への深い共感、といった日本を日本たらしめてきた誇るべき情緒までも蝕みはじまった。

・世界で最も金銭崇拝から遠い国だった我が国があつと言う間に物事を金銭で評価するようになった。

●教養(リベラルアーツ)の起源

古代ギリシャの時代にピタゴラスらが教えたものであり、自由人(非奴隷とはアメリカ的奴隷ではなく中下層階級)になる為の技術として身につけたもの。音楽(文芸、詩歌、音楽)、算術(計算法や数論)、幾何学(平面図形)、天文からなる数学四科と文法、修辭、言語系の三科。

●教養衰退の原因

1) マックス・ウェバーは「資本主義発展の最終段階では、精神のない専門人、心情のない享樂人などの人々が、自分たちは人間性のかつて達したことのない高みに登りつめた、と自惚れるだろう」と予言した。

現代人は、科学技術や生産手段の進歩を人間性の進歩と勘違いしたまま、自惚れと傲慢に身をおくようになった。生存競争に勝つためにも、生活を豊かにするためにも役立ちそうにない教養などは、前世紀の遺物でありヒマ人の時間潰しと見下すようになった。

2) 世界のアメリカ化

アメリカは教養を自分たちの意志で捨てたヨーロッパの遺物として扱い、実用性のないものとして見下してきた。未来を築く指針として、功利性や改良や發明、金銭などを据えた。これらは社会への貢献に結びつく隣人愛の発露であり、「勤勉と隣人愛」を標榜するプロテスタントの教義に合致した。得られた金銭は神に祝福された証として捉えた。

3) グローバリズム

アメリカ発のグローバリズムが世界に浸透したこと。規制なしの自由経済で強欲主義を生み、リーマンショックという激震をもたらした。世界で国ごとの格差、国民の格差を大きくし、社会を不安定にし、人心を荒んだものにした。

●ヨーロッパの考察

・イギリス紳士(ジェントルマン)の教養

あらゆる知的活動の基礎として、ギリシャ・ローマの古典教養、数学、加えてバランス感覚とユーモアを求める。更に徳性としての公正、自制、勇氣、忍耐、礼節、寛大などを求める。日本の武士道と酷似している。その教養、バランス感覚、ユーモア、慣習、好み、生活様式、作法などはイギリス人の一般人の手本となっている。

・教養市民層を攻撃したヒトラー

国家主義、アーリア人至上主義、反ユダヤ主義
教養なき国民による民主主義が狂った独裁者を産んだ。

・ロジカル・イデオット(論理的バカ)

一見論理的であるけれど現実や本質をよく見ないで口角泡を飛ばす人をロジカル・イデオットと呼ぶ。

●日本の考察

・教養どころでなかった幕末維新期

当時、虎視眈々と全地球の分割統治を狙う欧米植民地主義が真っ盛りであった。出来るだけ早く政治経済社会体制を整え、欧米の科学技術を吸収し、軍政を整備することが第一の課題であった。不平等条約の改正も焦眉の急で、教養どころではなかった。



・独裁政権は教養層を潰しにかかる

大東亜戦争に向かう頃には、反軍国主義などの教養層は治安警察により逮捕、追放により完黙させられた。教養層を潰すことは、軍国主義国家や独裁国家の常套手段である。教養層は、権力の理不尽を見抜き、批判し、抵抗する。強権的政府にとって教養層は常に目の上のたんこぶである。

・日本人が武士道や政治感覚を身につけるには

義理人情、忠義、名誉、欲望、勇気、惻隠、正義、涙などの飛び交う講談本を読むのも良い。

・身体感覚としての形を持たない教養人

西洋を中心とした借り物の知識や論理的思考、つまり日本古来の形、武士道の精神、儒教精神、惻隠やものあわれなどの情緒を忘れたままの教養は、頭の方でしか考えることのできないひ弱な存在にすぎない。

● 西洋崇拝の教養と決別する

・諸現象の真髄を見抜くためには、知識や情緒に根差した物差しは欠かせない。

無限にある雑多な情報を有限なものに仕分けし、その中から自分にとって最も本質的なものを選択するには何か強力な物差し(教養)が必要。

・これからの教養

現実対応型の知識とは、屍のごとき知識ではなく、生を吹き込まれた知識、情緒や形と一体となった知識が必要。

・情緒とは、これまでの人生で培われた心であり、美的感受性、ものあわれなど美的情緒、宗教的情緒も含まれる。

・形とは、日本人としての形、弱者に対する涙、卑怯を憎む心、正義感、勇気、忍耐、誠実などで、論理的とは言えないものの価値基準となりうるもので、獣ではない人間のあり方。

● 知情意

・「知情意」あるいは「真善美」 知(真)は知識、情(善)は情緒、意(美)は意志や道徳

・夏目漱石「草枕」より

「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくにこの世は住みにくい」

つまり、バランスが大切と言うこと。

● 論理の危うさ

論理などというものは風が吹けば飛ぶようなもの。状況や視点によっていくらでも変わりうる。変幻自在な論理などに頼らず、一刀両断で真偽、善悪、美醜を判断できる座標軸が是非とも必要。

教養という座標軸のない論理は自己正当化にすぎず、判断は根無し草のように頼りない。

● AI に知を無限に組み込むことは可能だが、情緒の全てを組み込むことは不可能。

人間の深い情緒のほとんどは、人間が一定時間の後に朽ち果てる、すなわち「死」という根源的悲しみに裏打ちされている。コンピュータには絶対的な死というものがない。

● これからの教養の4本柱

1) 人文的教養: 哲学や古典など

2) 社会的教養: 政治、経済、地政学、歴史など

3) 科学教養: 化学、物理、医学など

4) 大衆文化教養: 大衆文芸、芸術、古典芸能、芸道、映画、漫画、アニメなど

以上がこの本の抜粋となります。

広い視野に立った大変有意義な内容だと思います。ここで大事なことは、我々読者が内容を鵜呑みにせず、情報の真偽の判断、正しい取捨選択を行い、上手く活かしていける教養を身につけて行くことではないでしょうか。

ではまた。

株式会社アイパートナー

代表取締役 三村邦久 mimura@i-partner.co.jp

会社 HP: <http://www.i-partner.co.jp/>

〒222-0033 横浜市港北区新横浜 2-5-14 WISE NEXT 新横浜 3 階